

Hauser
MORAL MINDS
Chap. 1 What's Wrong
pp. 32-55
MORAL INSTINCTS

中澤栄輔 (科哲 / UTCP)

2008/10/24

トロッコ問題

質問1: 外科医が青年の臓器を摘出することは
道徳的に許されるか?

→NO

質問2: 車掌が電車を分岐線に進ませることは
道徳的に許されるか?

→YES

道徳的ディレンマの特徴

- (1) 義務どうしの競合
- (2) 一貫した説明を与えることが困難
- (3) 非反省的な判断
- (4) 人工的なシナリオ

問うべきこと

- (1) シナリオに共通の道德原則はなにか
- (2) どうしてその道德原理を簡単に見出すことができないのか
- (3) その道德原理はどのようにして獲得されたのか
- (4) その道德原理はどのようにして実際の意思決定に反映しているのか

道徳的ディレンマの解決例

二重結果の原則

より大きな善に到達するための**副産物**として引き起こされてしまう害悪は許されるが、より大きな善に到達するための**手段**として害悪を利用することは許されない

アприオリな道德能力

生得的な**道德能力**によって、何が許されるのか、何が義務なのか、何が禁じられているのかを無意識的・自動的に判断することができる

ロールズとチョムスキー:

道德も言語と同じく**本能**に基づく

チョムスキー: 言語能力

(1) 言語能力とは?

言語を扱う脳の機構は諸感覚を扱う脳領域に分散し、特別のシステムを構成している

言語能力とは文を作成したり、理解したりするための原理である

チョムスキー：言語能力

(2) 言語能力はどのように発達するか？

言語能力の初期状態は子供がその後どのように言語的に発達するのかを制約する

言語能力は生得的に子供に備わっている

チョムスキー: 言語能力

(3) 言語能力はどのように進化したのか?

幼児の単語の獲得

← 音まね

→ 音まね能力は先天的

→ 音まねする鳥などもいる

→ 音まね能力はチンパンジーにはない

→ 人の音まね能力は系統発生的に不連続

行為の文法

普遍的言語能力 ⇔ 普遍的道德能力

文法的判断が普遍的言語能力の解明に使用されるように、道德的に許容される行為についてのわれわれの判断の基礎になっている原理を解明するために倫理的判断[ある行為について直観的に良い悪いを判断するようなタイプの判断]が使用される。倫理的判断は**普遍道德文法**に基づいている。

個別道徳文法と普遍道徳文法

それぞれの文化が持っている個別道徳文法は
普遍道徳文法を基礎にして発生した。

いったん、ある個別道徳文法を獲得してしまうと、
別の個別道徳文法を理解することはできない。

(言語でも同じことが言える)

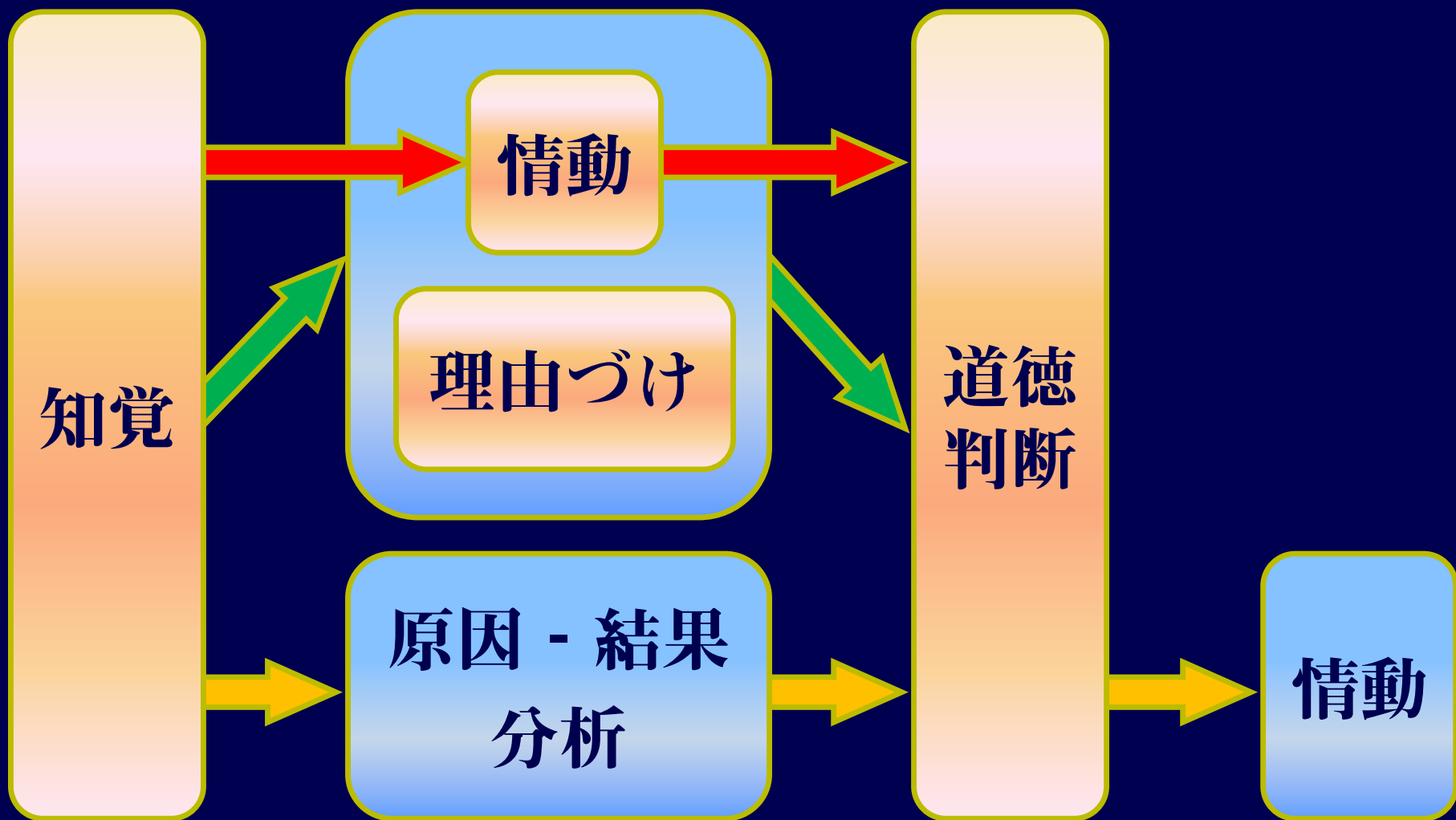
個別道徳文法と普遍道徳文法: 事例

- 幼児殺害 → アメリカでは禁忌
- エスキモーなどでは許される
- × 道徳的相対主義へと進む

(「子供を大切にする」というのはあらゆる文化に
共通する普遍的道徳法則)

- アメリカ文化とエスキモー文化の違いはたんに「例外」を適用する条件の違い

道徳判断の3型 —ヒューム・カント・ロールズ—



道徳の生成文法

個々の行為(音素に相当)

→ 一連の行為(目的などを表す)

→ ひとまとまりの出来事

道徳性は「個々の行為」の段階に基づくのではなく、

一連の行為連関に基づいている(文脈性)

道徳の生成文法

統語論的分析と同じ仕方で行為を分析する

[統語論的分析においては文の構成要素がその文のなかでどのような役割をしているかが大事
→ 個々の行為が文脈のなかでどのような役割を果たしているかが大事]

道徳の生成文法

何を

誰が

誰に

結果

道徳評価

道徳の生成文法

→ 有限な構成要素(個々の行為)を結合させ、無限に複雑な出来事を表現する。

[無限のバリエーションを持つ行為や出来事にたいして、道徳法則がどのように働いているかを明確にすることができる]

→ 常識はしばしば不十分にしか道徳判断を説明することができない。より深く、道徳判断の構造を分析しなければならない。

道德能力の発達

大人の道德判断を導いている道德的原理の分析

→ 道德能力の獲得

さらに、発達を問う

個別道德体系の学習

道德能力の適用

道德能力の進化

道德能力を構成要素(個々の行為)に分解

→ どういった構成要素が他の動物と共有されているか, それともユニークか

→ 道德能力の進化・系統分化

ポイント:

「意図的-偶然的」という区別を人間以外の動物がしているのかどうか

道德能力と他の認知能力

知覚, 記憶, 他者の信念, 欲求, 目的

道德能力にとって必要, しかし道德能力専用の能力ではない

他者の信念, 欲求, 目的などを理解する能力は「**意図的-偶然的**」の区別を理解するために重要

「意図的-偶然的」と道徳判断

(1) 会社の利益 + 環境破壊

→ A社長「利益になる. 進めなさい」

(2) 会社の利益 + 環境保護

→ B社長「利益になる. 進めなさい」

A社長は環境を意図的に破壊した

B社長の環境保護は意図的ではない

帰結が否定的な価値 → 意図の帰属

感情について

感情も道徳判断に必要

だが、道徳判断専用のものではない。
この場合も文脈が重要

脳内システムが完全な一連の行為を認識

結果に基づいて道徳的評価

感情はこうした一連の道徳的文脈において生じる

まとめ—道徳能力とは？

- (1) 道徳能力は道徳原則の集合からなり，道徳原則は普遍道徳文法の構成要素となる
- (2) 道徳原則は自動的ではばやい道徳判断を供給する
- (3) 意識は道徳原則にアクセスできない
- (4) 道徳原則は経験に影響を及ぼす

まとめ—道徳能力の獲得とは？

(5) 普遍道徳文法における道徳原則は生得的である

(6) ネイティブの個別道徳体系を獲得することは、すみやかにそして苦労なしに行われる

(7) 道徳能力は個別道徳体系のレンジを制約する

まとめ—道徳能力の進化とは？

- (8) 普遍道徳文法における道徳原則は人間にユニークである
- (9) 道徳能力は他の心的能力(言語, 視覚, 記憶, 注意, 情動, 信念)とのインターフェイスを持つ
- (10) 道徳能力は脳のシステムに依拠しているので, 脳のシステムの損傷は道徳能力の崩壊を導きうる